

ふしみさらだボール子育て情報



「非認知力の育ち」
令和5年5月10日号
板橋富士見幼稚園



遊びは知的発達の宝庫

私 園長は、幼児期の保育に携わって45年近くなります。この間、社会の仕組みの中で何よりも大きく変化したのは、少子化とICT（Information and Communication Technology「情報通信技術」）の進化ではないでしょうか。少子化は、出生率が今や一世帯の子どもの数が一人となりうる傾向を示しております。こうした中で、情報通信機器の進化に伴い、私たちの暮らしが大きく変わろうとしています。

動画やSNSなど、知りたいことのほとんどの情報は、「検索」によって手に入れることができるようになりました。こうした時代の中で、私たちは情報通信機器を使ったデジタル情報に依存していくか、それとも「知りたい」と思う疑問に対して自ら足を運び探究するアナログ化を選択するのかの二極化が進んでいるように感じます。

では、こうした時代の中で、乳幼児に何をどこまで提供したら良いかを探ってみたいと思います。

まず大切にしたいことは言葉の育ちです。幼児期の言葉の発達は、知的な発達面と大きく関係することから、慎重に考える必要があります。

言葉は感情と一体です。ですから言葉が育ち持つ時期に、感情や心の通い合いがない情報機器はあまりお勧めできません。しかし、今の時代の中で乳幼児にスマホやタブレットを与えないことは、難しいことかと思えます。であるなら、いつどのくらいの時間で与えてもよいのかが問題となります。乳幼児の脳への影響を考えると、1回の視聴覚時間は、15分から30分程度が上限となるでしょう。



電子機器の色彩は、自然界に存在しない色であり、子どもにとっては、強い刺激となります。また、動きについても、例えば動画に出てくる動物の動きを、別のアングルで切り替えて見せた場合、同じ動物ではないと認識してしまいます。

つまり動画は、子どもにとっては大きなストレスとなることがあるのです。

【写真：園庭のイチゴを味見中】

自然の中でゆったりと探索しながら、好奇心や探究心を育てていくことが、実はとても重要な生活条件となります。与えられるものではなく、自ら見つけ考えることとの出会いは、確実に知的な能力を高めるといわれています。つまり感情を豊かに育てることが、言葉を育む力となり、幼児期は、非認知能力EQの育みがしっかり積みあがると、認知（知的能力）が育つとされているのです。自然と向き合い、好きなことを探究できる場を与えてあげてほしいと思います。

